

第30回写真の町東川賞決まる

海外作家賞にヨルマ・プラーネン、国内作家賞に野口里佳の両氏

第30回写真の町東川賞の受賞者は、海外作家賞にヨルマ・プラーネン氏、国内作家賞に野口里佳氏、新人作家賞に石塚元太良氏、特別作家賞に酒井広司氏、飛弾野数右衛門賞に故増山たづ子氏がそれぞれ選ばれました。

東川賞30回目の審査会は、2月下旬東京都内で行われました。今年には各賞それぞれに卓越した個性的活動、活躍の足跡を残してきた方々が受賞し、節目の年にふさわしい選定となりました。

海外作家賞は、ヨルマ・プラーネン氏（フィンランド・ヘルシンキ市在住）。ヘルシンキ芸術デザイン大学（現アールト大学）で教壇に立ち、作品は先住民族やさまざまな言語の写真を風景の中に重ねて撮影したもの。絵画や写真の表面の反射を撮影したもの。「美しくも深い意味をたたえ、海外作家賞として申し分ない」と評されました。

国内作家賞は、一連の作家活動に対しての評価が集まった野口里佳氏（ドイツ・ベルリン市在住）が受賞しました。「少し引いたスタンスで対象を切り取る構図が特徴的で、絶妙な物語性を醸し出す。鳥、家畜、昆虫、そして人や太陽の光もロケットの燃焼もプロジェクターの光源もすべてが等価で静

ひつな写真画面を構成する一要因にすぎないと感じさせる」と評されています。

新人作家賞は石塚元太良氏（東京都在住）。受賞対象となった「PIPELINE ICELAND / ALASKA」は、2007（平成19）年最初のパイプラインの写真集を出版した時もノミネートされました。

前作では4×5版で撮影された風景が、今回は8×10版で撮影しています。「世界中を大型カメラとともに旅しながらのスケール感と勢いは新人作家賞にふさわしい」と評されました。

特別作家賞は酒井広司氏（札幌市在住）。北海道を対象に撮影を続け、長らく「Sight Seeing」シリーズで北海道の原像を探るような風景写真を撮り続けてきました。現在「偶景」と改称して続いている作品シリーズに評価が集まりました。

飛弾野数右衛門賞は8年前に他界した故増山たづ子氏（岐阜県徳山村出身）が受賞しました。

農業と民宿の経営のかたわら、徳山ダム建設計画から建設にかけて、ダム下に沈むふるさとを、コンパクトカメラで生涯をかけて記録しました。「10万カットのネガと600冊に及ぶアルバムに写る写真は、写真という存在の価値観が揺さぶられる。一人の女性が積み重ねた日常。写真行為とは何なのかという一つの答えがそこにはある。日常の積み重ねの写真が大きな意味や強さを持ちえた」と評価されました。

授賞式と受賞作家作品展オープンは、東川町国際写真フェスティバル期間中の8月9日（土）、受賞作家フォーラムは翌10日（日）、いずれも町文化ギャラリーで開きます。

海外作家賞
ヨルマ・プラーネン氏
1951（昭和26）年、フィンランド北部生まれ、ヘルシンキ在住。フィンランドを代表する写真家の一人。ヘルシンキ芸術デザイン大学（現アール

ト大学）で学んだのち、同大学にて教鞭を取り、ヘルシンキスクールと呼ばれる若い世代の作家の育成に貢献した。



©ヨルマ・プラーネン Jorma Puranen
Imaginary Homecoming, 8, 1991